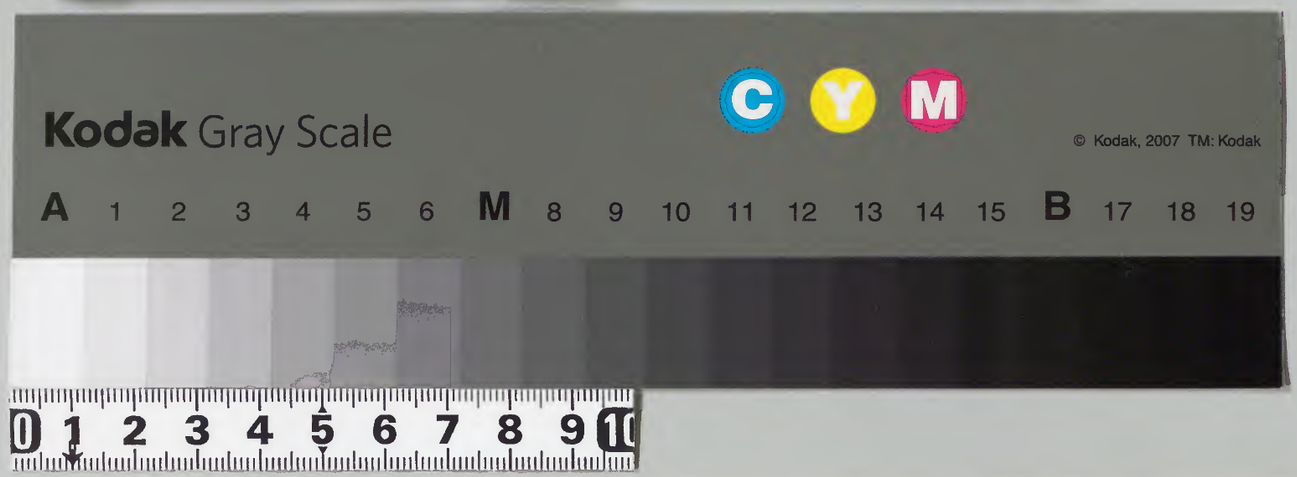
国立公文書館
National Archives of Japan



内閣文庫
舊號 和 18734
冊數 8 (8)
函號 204 135

庫文閣内
和書
類
二八三四
號冊
四八三四
函
架

和書門
類
二八三四
號
二八三四
函
架
八
冊

内閣文庫

浮世風呂

醒睡笑巻之八目録

横佩
平家
かたり
ちうく
茶代湯
祝儀多

浅草文庫

醒睡笑巻之八

頓化

或大名の茶湯なりしが時に紙子上下八雅楽あんやとの〳〵饗膳ある中より今茶をわもるる金財をもとむる人〻ふるまひけるに茶日なれば天下一き志のゆゑなるゆゑ私いてまいらせ茶日なれば上下とはするといふ事はなしやうに我〻斗乃ようそハ浄なないもうしいふ神道をもあはせられさ和之神乃祝宣よ

春日大明神とあり
一
尾州熱田大明神乃参礼ハ先祭参詣
神をいはゝゆるゝ事婚両宮乃ちく祈願
あつまり 社ハもとより也 ちなみ
参りゝ ハ 社やしろまゝ 百姓あまく
つまゝ下向するまゝ熱田乃祈願ハ
八人てゝいそしいひ清 高度ゝ ゝをんれい
白張燈束ハ烏帽子まゝて金麿の命すゝ
ひつよりもゝ ゝあり大ハおゝきゝのまく

たゝ神ハ合ハ人まゝ
一
我州ハ家康公天下をゝ ゝめきれゝ
始御ゝんのある尾州ゝて 毎月来つゝ来ハ
月ハ八ひゝゝてやゝまきん又ハゝて清歌ハ
やあんまゝ 伊宮あゝにあゝ志のゝやゝい
やゝゝハ東ハてあゝハ清まゝと祝まきて
たゝゝて我ゝ我ゝ 存知ハ明年八月ハ大
将軍東ハありゝ志ゝひ月ハもゝて大小夜
せきまゝたつゝ書てあり

一大間清兵衛ハ豊間大明神と申ハ吉田大神宮
より知行二百石のふしるしとて人乃ちかなまを
奇川殿申し上ハ中や大間清兵衛ハ神まをあり
吉田大神宮ハ人まをあるりあり川たよの

一今ハ武義乃江戸扶桑国の家頂る出雲
殿ハ大田義清守りつたいて大田乃実と
いひき名誉乃武将てらく様なるを少及
世ハ乃方ら乃ちもの機嫌乃常氣を図
てんせ乃ちまもれ

一わらいかハ松ハ〳〵つき清ちく
ふ〳〵ねをのきたるそてんる

一伯長公清州城の時家門々之伯
伯須武義ハ人よ碁をうこせ
義ハ碁ハ上手ハ碁ハ白ハ又そひとりより
速故之伯殿ニよハ伯故伯須殿之ハ本武義
殿ハよ何度家門殿と指をおりて時ハ機嫌
なめるのハありんハ白の又とハ速敬之男と
機悟故十方宜ハ本来無東西何度有南北

けを法たまいて生死岸頭大自在なるん

一 信長公摂州津へ出陣なされ時物とつめ

とこれわてをこうを進上せ千貫文之

茶殿はいりありて

のけなされふる白雪をつめきたを

けわてをきき見て

一 摂津の玉大の茶ま洞家の宿一休より白茶

なるを是紫野の仏法 指捷州堂 女郎花

紫苑 弱勝 我者

為なるを是紫野の魔法 愛岩風より

比叡山風 奥八鍬 馬乃山 飛

一 鞨の頻の栗門乃風情 四季の花形

ある殿様 住吉 波乃宿 八ばくより

人を来れ ちをそひ あきハすゑ

なふあつまのけてのおりひと

あるよ 形の

郎をそ 川をへき富士乃雪

ちをハ住吉へと 清せをるよ 孔をく 住上

よなをうれてりけまバ又
いやしきものハうへをうれず
とあり　扶桑略記ニ云ヒ
水晶の海へ丸月の影ふかく
一
天満宮乃開山慶忠国師ハ都ニ福徳ニて
ます海ニ信敬ものゝ扇うまるすわうう
人稀影をとゞけ云よするやう世間ニ貧窮ハ
事をハなるべて有ものすいたゝ又善ロまれバ
有ものすくなくそゝ慶忠ハ御有
奥ちめくらすくまぐたまど福合よおハ
ちまずハいんとはまハよ卯ぶ有あるりみ
うまくすかそひんわうゝ長ぶなき
よゝのおゝり
一
面とハなせにいふやゝおるてにゝるわとに
安へしり間ニ家財ハなるふといふへきそれハ
めんさうといはん
一
休和尚ニ松殿ハ有といふお有を抜ひてむ
せ一ハなるものやうんを名をうすして短

冊を送る事あるを
あらぬ人源心のおくよすを世をも
こてハうきせ乃さうしちうきう
返事
身をみるもたるよ程こそうを世なれ
源心も帝しもあるうれ歌

一
大阪(おおさかの)臺(こ)をもちる人ありめつらきさ海に
沙汰(さた)られハ又変るよるよ志おうりき
或時宮いりきて兼(けん)ひと不堂(ふどう)元は

一
京(きょう)長崎(ながさき)堅(けん)ひと居住の時天竺(てんじく)寺(じ)ある和尚(おしょう)
坊(ぼう)ある人を出(だ)し祇園(ぎおん)の愛白(あいはく)ひ夕
花(はな)よたるを我人来(らい)てあそびんといい
きりけ老ハ
猿(さる)の尾(お)木(き)もちるぬ和尚(おしょう)
彼(かれ)をりてあ(り)を又(また)尾(お)見(み)ある面

ぢんや中くとして猿沢つゝと流れて
澤庵境まで名の高き

猿乃庵ぬしゝやゝ時雨松ふり

一 俗の二人来るをちんつけ途中に波をせき
け大河をハ俗として海まんや一人ハ山河と
橋ありん安くゝ渡ると二人ハ浦をあさと
あつてんと二人ハひさ川をわたりよるんの蓮花
ぶあり物と

一 孫乃ハ若流ちり〳〵色よ生を来せて春休

あり〳〵感じる所蓮華寺中よ神人の住所来れる
来所の人きたとふたちハ古代上よ文時代
上に夢ある人のおかすやゝ時ハ見る所元
なる〳〵相も参拝をうちふるかちと
月うえ物ゆる物うちと不審生すえの個の生
個ひいふるうちは六羅乃古乃郎ハ春也
ぬなり玉角丸京中雲ゝあくありちんぬ
雲ハ庵丸光あるひひざそとたふあり

一 百合の義をいはけるふを又落ひて幽氣法市

康まてゆりてあけて高貴の
一 猶ハ愛ふひらりハ捨得とめいてる名をいふ
てあるを 和尚あり志ある者を二人つまさきたち
先乃法花ハ安心ふ捨法とも云てひと名字
志ハ次の者いとん奉ふりよ我ぶもて法
つまりてひと
せあてのをてをてを
一 法花乃門と時宗乃法師と和尚をとりく
参詣ありしがいでる志てりけん法花乃
門ハ代法華乃をもとめる一段氣を
入て時宗ありばと名をつけたハ何の子細て
時宗ハ如こそとくひるおりたるすがち
時宗乃法師我を四月日暮又葬毛の墓
うたい名をハ法花葬毛とつけたよいら
なきハ法花とハいふとく彼馬にこハさに
一 参後をふいの城を廻乃信乃物すを
五十月乃末高人門の弟子をうをあり
彼信一ツとりてくんとする毛ハとともまば
うも門を出ずとありこれハ門弟やき曲を

やといて扇をかちらんとするこハ我も
いと日信ハしらく月下の門とゝり

一 伊勢の素盞嗚古墳とて 醫志あり天孫
ゝ行ゝ世あるく法別立寺と元亨文叔や
いふ信下向ゝ毎月射撃ゝ法華山と海る
時人ふ素盞嗚て古墳とハなるおとゝ九州法
すふされハ素名ゝつゝれやきいとのゆん古
墳を百つゝとゝいふ英渡てゝるふハやまと
ゝ百ハせんあを

一 吉野吉野ゝ山あにつけたる菓子大間の御
茶へ御ゝされハ幽菓法師むりけ世ゝ白
ゝゝゝゝゝ時

若ゝ代ハゝ代ゝや千世ゝさゝ色ゝの
いとゝゝ成ゝ太けれ むすまあ

一 湯殿鏡湯ゝて乙津寺梅れたるいふ彼ゝて
書ゝ海ゝ本も少ゝ梅乃花紙公
いちゝ一代ゝ蘭叔和尚ゝてあり酒もれ社
ゝて正ゝゝふ信小一ッのゝあり梅酒

さらに何る身飲酒ハこれ仏戒なりときく
飯をもたへる飯をいましめのなありや申くい
ない又な　あさいがい禁戒に　和尚ハ酒茶論の作者なり
一　早別と越茶と兎あひの附越茶乃太守乃
前非て鉄粥すりぬ未発より一派の右来
ないましと申こを発ておハせし東堂申しく
国にハあるまいからてひとありし斉持なる
他指として
一　幽斎法示あるところへ立よらせ玉ふ家老人

一　立名挨拶仕千左の脇に机に白砂女刀歩
あり兎て出後んす道ハそれな我せられ清書
負てひとやしらり掛て書持なと不め頭ひつき八
出後しひらこれ字は女らに御れといひなて
再へと云りたる後よ
一　あら坂やさひよを憐むるおやまろ
兔まも角にもらつき人なふ
一　山寺に入いりてはてしくおもわき境地ぢひ
大君ハ京そひ来と申られハ維持れ五音

永南寺石十系乃古墓也とさとへ秦氏始
皇の地ゑまちりて八系の石ハ以ゑを
用られひど活ゑハ檀那あり禁よんて系
をたりてこさけまるも辟て為ゑハ活けいあり
さゑをゝ性二時糟糠汁ゑ風情ゑれこ
ゑに気けいあるうゑ
一けふ大名乃中宮ゑ呉名を去掉とい生ゑ
為ゑるゑもちゑよりさいゑをハつけしるゑと
人ゝけげゑえるゑひゑり悪他意ゑハ性物
のすゝなといふゑてあゝ海すと又別人石
性物ゑりさゑゑんてあゝ物と はのぶあゝけゑ
一九別ゑ本ゑとゑ書ゑ此上ゑあり八月十家
ゑ紙包ゑて数白ゑるゑせんと月ゑるゝとゝ
紙包の号ゑゝ紙月ゑ月ゑるゝハとゑ
されゝまれすゑ元ゑ絶人ゑゝ
月ゑゝ日ゑをゑまゑ乃今貴ゑ
一翠作院道之乃ゑゝ服装を持ゑりてゑん
とゑ時ゑ祝ゑんハいゑゑとゑありに賣

めし二百八十と五箇世しを

一京の所にてあられ柳乃枝にあるをもちあり
人は柳を人身にとりまるをてとなこハ
なんぞ猫籍なり志すや柳ハこどりとい不
事を実也道理ありとすかもちをもち
てあるを奥をハしり方ハ四角なるなを
いまハそれそはけるハくれる井 小

一ある人俳諧を来りしまの事を上手とい不
実ハいまハ拙のこと敵の敵をつけて孫を

びすてゝ酒りぬ志ハくゝ変ゝ上に曰乃
まる下に雑をつけ後あつくゝる也ゝに
口ゝす色ハいなる面目子細ふし笛ハ言ハ
到りくゝとふくゝ有ゝに
何とゝれも先ハちがさる
日を元ゝ西暦ハ十八日ハ 元理

一産愛の真水初産を せんとまるを云あれハ多く
むゝまる若くゝとい ひてひやくゝとゝ時ハ 産
のに腹立ゝい咏をそちとまけて道

我ハ相伝をふくしてあるふよと

一食を忘れ人よむふる餘飯をあらく糸ゝ矢

ゝ所より源頼朝より未代の金事ハ弟一接こはり

とて業なれハすくゝ大毒ゆてうれこ毒と

それハ彼人ハ指南を尤天迦代後也天上天

下いくゝとくゝそんと

一ちうくゝぞきなる云境より医師者ゝ裏系

よのゆる大名元なるふりて何るそめつゝき

半ハふきうてそひつ毒ハ境ハ大きそれ

おうゝ所本屋うにかりまやはきあれゝ家

云ひうそそあ梅いや先ゝせりうとふ

ゆうゝとゝあとうたんわくとうてよ

一一目ゝるかむつゝきうる云俳屋ゆ来り

ハ布を深られよ我ゝこのゝあり敵ゆ上この

住酒を腰ゆハうゝ中なる酒をすうに

ゝ下の下ゝふゝれ酒をつけてよるゝと

ゝふくゝゝ女子後日を強ゝあれ来しゝや

中くゝそわくゝすきんれハ上ゝの酒よゝ秋ゝ

を中代酒よ八島を下のけてまれぬ酒は
洲濱をつけしれ八波男稲まれん女もあり
深尾ゆちんをたゝもうたい

一 夜代歌八酒乃おわるもさもにより
のゝにゝふゝてゝ我わるゝれ
山夜八ゝゝとおゝ事もゝ

のみゝふゝのふゝくゝゝ丈

一 尾別祇園寺よ澤良ゝふ長宅所の物
ゝゝゝゝ一人来り為てゝ澤良孫よあり

てゝあれ八ゝゝゝゝと孫よあを鬼角ゝゝき
物なゝ長宅来著他信ゝゝゝゝゝゝ
物そゝこゝをゝゝ山け

一 山城乃酸磯寂静ゝ谷ゝゝゝて
数義の書少ゝゝゝれ深山ゝ 心数
物ゝ八苔よゝゝて凡ゝ 宗祇

一 境ゝゝく質屋に米を十石金銭をもちて
来て八その代ゝゝ米を九て行ゝゝれ法文
ゝゝゝ書ゝゝゝゝゝ銭をゝ

すべり一石性りて強りれとも無尾か
あくあるひとよつけて一石ロて四月
迄なり強を指来り麻茶をけとゝん
とするに強よ重しる茶一石をかりぬ
盗人をいひけ強白もの無しる茶ぬく
なくハ結とるまいとゝ不手付年をまゝ強
をうんとくたゝもの元り一文もとるべき色
といふ何のゆゑやと弱者ハ我がかいく強り文
ひとりもの茶てなくハとゝ不まいとなり我も

そゝの強てなくハ元まいとゝ他意分明なる不
多毛ゝてゝすゝゝれ

一御金ハ入くつゝまいり使けこゝ人の関白嚴
へいてんとする時小性尚今祖襲来の法度
ありたゝすや屋ゝ不と死ぬゝとゝ二字り
年禁制や法たくみ殿ゝ二字をいゝすゝ不
板ゆゝせよ白ゆゝりとすゝゝちあるあんのゝく
何ゆゝやあゝとゝ弱あり千殿てゝゝ来れ辻
ゆ屋白板を棚よりて重来せゝ何ぞや

植物を付る風炉と釜とをえらび出あるべう
つけをいふやつるる木釜をたゞやけて仮ま
ゝ用ひきゝそれをあはせ法度ゞやふしき

一 大坂を京尾町を送長なる男略といふ者
らゝ略といふ者らいふくあり婦人賣
てやゝおのひとりを雲雀をまれて略や
とて賣ぬ山家の海りえんすまゝ中ゝ略ま
あすつをゝとりとあらそれ又なるゝ大坂よ
ぶらゆきまゝとまゝといふ財名賣それ物を
ゝ取ぬ人の中年略ハ一いろあるゝすゝ二ゝ
百ゝ記ゝ百ゝあるそと実ゝ記ゝ又
ゝゝ行ゝり

一 蔵ゝ信育用乃鼻を使ゝまゝ物なるゝ光
仏法する者いなゝ世ゝ拝義乃時なるをにぎる
糸様えれを義ゝ花ゝ柳ゝ名 宗紙

一 京のたちゝり悪業来り巻物ゝ芸能
ゝて能なゝいゝ女房義へ行ゝまゝ物
一ゝ物をゝまさゝ箱ゝ入ゝりゝ物ゝ

すれ門を銀一枚ゟ元やすしてうすゝの弓
月女房ゟ元へ又ハなし藤家ゟいひあゝ
盗人二二町廻りしゝ付人をなしらり今の世
まけんを廻りめくとすゝまち廻る銀をうけ
とりまれ拾八文れはあらたつくと頻よあゝ
はさみ紙をあきれハありまれ拾はさもとり
年銀をも廻しとり　年をゝ作云や

一　摂津国布引の滝　宗祇
いはをたゝみたりはる布宝を

ゝふ品ゝゝたきつゝ
一　大関御不風ゟ月ハ入ありはるを蛾屋伯者守
四拾ゟ弟んとくふれけゝ知ゝ色いく
くゝと柏子よりかゝり真をつくまれ千俵
蛾屋をとゝ色ゝ北ふんとおりせあ拾辯
退せゝあを文銀ゝ知ゝふ世のゝあゝ公せいく
くゝと他を元やさ銀舌ゝ仲ゝゝ
一　孔子道を行治ゝ八丈ゝゝる者あひぬ孔子
ゝ国中ゝ日ゝ入不ゝ治濁ゝいつまゝゝを

きて孔子四の入不入茶湯ハ茶ト茶湯ハ茶
日ハ武士ハ只命ハ命茶湯ハ人を殺すなり
入不入ハ茶ト茶湯ハ茶なくして中々ハ
ゝこき事也と威ハ殺るたくあるハ
ぬるりとり人間活せ

一 茶ハ智恵ハ人なまねとりなる志あり又恵
林ハ人学者と茶ハ門前ハ俗名恵
ハいつくとなく人なれる扇をあけ友ハ
笑ハ時ハ人あく字を也と云ハ云ハ

扇をあけるハ一字を手ハ戸ハとハ
半なり早家にあて字なりと打る
ひらち家ハ

一 宗鑑明月橋ハて或俗和尚ハむ人ハ月
橋月なれハいん 和尚ハ主有天地と灯

一 雄長老霜月の事ハ茶乃橋を見てハと
ハの人法師人ハにつりておとり長た
立より国ハいつくそ下型乃志とハ
飯行とそれに腰ハ志もつけ乃

なす野のいくハいかみてさらん

一法花宗乃ちに千部乃経あり名ゆいかみ
もうこゝなる男多ゆ参りて寿をあけふ計念
仏をゝ名我ゝ唱きみをいくそちま今
はやうに誓形名ゆ　いかもいかるよゝ多代
より

一名護屋陣ゝ大閤様御具足をめ多ゆ
御をのゝゝ也ゆ我部乃うつりゝ也
て

御乃中に毛成ゝてありける
と御ゝれ八すゆもち給色
釣針ゆ加りてあゝ　甲貝

一新田勇太将軍江ゝ乃御歌ゝて大石流清
振舞なまゝに市蒔ゆ乃の汁を御給ゆ
再進ゝけりつゝを市蒔せゝたゆれゝ
姫ゝまゝ乃けやたゆくゝゝ乃
日元和九年の春
山くゝ雪ゝあゝまや春ゝ面

とふおもしろき
にほひこかしをあはれさわすれじ
又
高き枝をやまくらまゆふ
と云句
ふしの山扇にかきて二三文
又
ひ鶏あけて声をとりたる笛根の
目出度乃年の始りやらん

一 武義あしふえふんまれてこ川霞の
書れ日そとしもし人来り家に入られしは事の
わくもあらしやくといふ事よ宛ら足に
あらわり内々わしらすはうちをあけりとりて懐
ゆいれ奴我変にあまりあきれはひき枝あ
かくなるまでさそも恥らしや人の足つ人とらる
ころれバとり付きし棒すて楽しとうふ
変へ文人来りぬさらばの一とあくらいしと
いふ時すみやかに是くあつきさへ懐に

入ふ色はある海ふちよりまんたてより
おゝわれをり

一宗紙海行乃時ふ中ふておるひより乾人
之人行むふ一人ふ
一ッあるふ也 三ッふ又てより
之ふ日ふ紙公
たくひる紙小袖のふりれわこうひく
又次乃ふ
三ッあるふ日ふ又てより

又宗紙
月と日ふ入江乃水ふ新きて
又ひとりふ
みッあるふ一ッふてより
又紙公
月ふ清ふ之ふむるふあるて
太之白ふるに学て後之人ふちふ又宗
うせて きより
一 後一検校ある社家て物ふりの法あて検

よハやうく矛をつくふりとまでめれ紙業
磨を撰のくすり身ひうゞゝと聲めるを七
尾撰授受紙一ぬあハせく
撰授乃目ゝ紙業慶もむるる
ゆひきに出せんとあるものるりけり
一大臣撰ものちたる侍のるる所撰りたまば
雄長老
のりくゝまくゝ京あまれる大臣のさ
〈今為婦と云ふやいかん

一虎獲野干といふ口宇をりけて宣あり
辛を一向不文字なるを知りる人見ハ何
といふ事ぞ千和を知るぬるのうつけるあ
とるもちも知るまいものとくふハ我ある
まるべ千宣を撰ますハるれるまゝと
りけつくゝ身知るり辛知るうけこひぬさふハ
虎ハ知ものとるよ獲ハかくゝよ聖ハ
つ稱よ千石逸言ゝ辛まけてふるもひ
りる野干ハと一言よりふるハ問者ハ問ぬまけ

よるべきを二字よみとけるなり恵飛家なり

一 山中検校死去ハ文きりとして四十八ト云也

ゆゆしく雄長老

南之坊孫兵衛四十八まてなくして

今そなるむしてのこの山中

一 西行法師歌の時津の玉七瀬の河をそ

麦粉をつかせたきりなむせたるを言

とより伯の只つけ

一 河ハ七瀬乃河と少和也

一 信を只れハむせわるる

時より西行の西字

伊河ハ七瀬乃河と少和歌

めしるるハやせわるる

伊三郎乃札をつ川順礼別醒井ハ水の

もとにのでん麦粉を食せんと元ゆ義

三まつるるよ 暴風吹おろ あをなちる

うちそれを

粉つる麦粉ハ風よりちそれく

りふ付あるかのあをしてのめ

一 山吳乃郡坂本ゟ東ゟのわる家ゟ公人
ゟて付あきつきいろめくくつるゟ大津ゟ
てむふより社ゟ人来るひゝと付あり
柳の清き社ゟの都ゟ彼與流て
色好ゟりいふ俗家ゟ志ゟとりつきけ門
ふゟるハいるゟゆゟ見れゟ人ゟんゟの
志ゟゟ志ゟるゟ志ゟく潮あるて家ゟの門ゟ
社ゟく類ハいゟむゟゟ中ゟゟ服ゟ見ゟゟ

殺ゟ悪ゟゟゟふゟ時我ハ我国検校ゟ
中ゟあゟゟ志ゟゟ見ゟゟゟゟゟゟゟ
社ゟすゟいゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟ
存せゟて猿藉ゟあゟゟ他ゟゟにゟゟ乃
学文ゟハいゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟ
きゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟ

一 当清院御宮類改への雅記 ひゟりゟき
の義測 ゟりひゟけ ゟりゟき
御ゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟ

ひをけきいうなるまるん

一 旅人在処乃者に川を八何とゝ云事ひそあ
河と言ふさゝハこれを渡てよべてあるひ
を指ゐてすゝ結えてあるよひろけ口
すゝのゝ魚ハなゐ乃いやあるよりそ
てゝハゝ

一 東の野別常源の前ゝ家敵あだまを生
いゝつゝ有ゝ所ゝ家ぞやゝ敵ゝ敵ゝ
八月八日ニ十ニ日まりゝ有ゝ

野別

第作乃作の歌ゝ有ゝ

一 越前と加賀ゝ一向宗ゝ合の時能登の
ある命下信ゝ有ゝ敵ゝ八幡大菩薩
味方ゝ八幡大菩薩と念する七一巻一級
利生ゝ為ゝ有ゝ八信ゝ味方ゝ八沢世あ
敵敵ゝ後生ゝ若処ゝ守ゝんゝ言ゝ
祈信先ゝ有ゝ河を渡ゝ山成又信ゝ
日ゝ有ゝ為ゝ有ゝ能登ゝ

これハ信のいる何中てなくハ一服中さう
物をと

一 本村の宗宣として吉野の代変なり家系
ハ家あり系の湯をて之顕院殿を請
ゆり次へ出生あり時ハ女なれハ母方
ゆりちゃ名ハなたいかをとなせ給へハ名
をよる給より又一人まりいるの名代
なる給あまハ母とゆけるおそすかち當
年ハあそまさられ

ゆりちゃ名ハ母方いるよ又
おもなぬかの母義なり

一 之顕院殿へ書可相伝して給り清道
谷の橋御ひりあり一百住まと御のれを
ゆすむめにをすやをりの系様
とりられハきう我
ゆりぬまをまつやをんの系様

一 慶福大納言殿へ書可参りてありし碑乃
根よ第一すと呼てありん事やなる有見

まいる時あきハ雅氏が菊島の家へ行
て咲さるより今一句と仰あれと
壁に耳うくまや年経る菊の花
とゆわゑ廣稽庵
たそかれ時の秋乃盗人
九月十日 素一の宅にて行しかるかを
業をつゝもむるいの至りて
自然ハいろはをむる宅に業るか
一 大海日乃狀生より毋ふ曉より

夜明て清天よりハ素丁
玄年 八月日本まれやるの素
一 越後乃太守乃景公園の中林象をへ乃氏
一 礼そ二月 鈴せ行ハ行遅よ れる
打ち寄なの自物ちの家ハ数かり
ちり時ハ為景乃一図家花の端的 和尚
仰應生答時節花不備春風乃景公
云時節ハ不備春風和尚一切そ奴生業
為なるかされハ和尚云春風之家也

汝今日教我

一 為京公物語次ぐ源山氏巖穴に住居の
給ひ彼れは何事を聞て
来たりて物語さまし給ふ為
崎陸に住する人や給ふ心あらばとて
さしうつむき給ふ人は世にも思ひねと
時為京公答給ふ たゞ給ふ歳月を
如何来た問へ給へ 答へて曰く
細川幽斎法師に逢つけたこうらの変を者を

一 なむ武蔵れより富士八えぬやう給たまふ
それ時よりてえあれへ御覧
えとすかぶちこだきを変へあるえ給へ
ど給ふえ久ざりれば
方角もいきちう事に目でこの
ふをえつけのこうれいらねば

一 世に名大名ますく威勢ありつる人なれと
たち中絶為人なり宿りてあれ者者
身八すくこかのおとこ次ぎ事八書たこ

をそていねらるゝ物哉

流すゝや世をさまりたる成まり

人さわるゝものなしゝ

一幽霊法華経門前の桜井といふ旅宿を

きりぬけあるゝ時ゝ人をつゝ殺と思

きうりの云 境観院やけるくあるゝ

めばりや昔よりあり事よ

こゝ人をまゝ牛に酒乃多食よ

一焼ゝ不ゝらのゝをこゝつて

一海ゝ底黒ゝいふたく中なる氏ゝ川をゝん

ゝす代をたゝくれ八ゝ人るゝよりわ

ゝ川乃祥るまわゝ氏黒やたゝのん

あすゝひゝまく先ゝありゝ

一山海宗鑑汁のまゝよあゝるゝ時ゝ氏

氏ゝ屋へゝ

武士氏いゝやゝふゝ乃無すゝ

ゝひきゝめく十二来たゝ

無ゝ屋より西寺

武士のいるやうなる色を
ぬりまぜて八朱をやる
弘法大師なのゝ法華
ゐらいのおけのつけハふくそ
一大風ゝ強乃おわりを焼おてきれ時目を
ゐけゝゝゐ法人のもとゝ俵をこひよつゝハ
すゝゝ
ゐ乃ハ蝶(むつで)乃ゐ紙中せる
一又ゝゐ俵中なゝ

一あるゐ家四方のもとにまり頭巾をうすれ
て頭りゐれハそのうゝ文をゝてすゝ
ゐりゐる
行軒平の極りまたゝふゐ
法立寺帽子ゐし弦川
道寺
立ゐまいるやゝんとゐるひゝ
歌人氏頭巾今ゝりゐね

平家

一小松内大臣重盛公ハ天逝の者にあり
本よりちからもちなんだとりてるうそちうる
時代ハ二子舎厳遠ひるれ出ちくも醫士
問者といふ平家より重盛の定業も醫
療家のいふへうあるたる入滅あん
やといいれた
人をとゝめん云此業ハなし
佛たゝ遊れ奴有るあきて 宗祇

一一向不文なる志平家をきうんと行ふと
てあの風情乃年と入事あんやしほと
ちらさるもてがあれきて海りめるまるに
と平家をきうれたうちまハ本平家を
一段おそろつりはるは時と段乃のお
めらでらてびきてと
一土井乃次郎実平ハ大ゆれ本戸ゆ段
お渡てひくるとまれハ来子おるし
ひくあるてあるめあきハいるあやせあてんハ
海ざりをんとはれるまきをてを段
ひんそひくしるとられり
一橋乃ゆきけてをちらくと走りるる
をやくもすまハるするそ地ハ絶り腸よ
まるる四まて松ほくよといられある時又橋の
ゆきをきをちやうくりりるめると
かりりは
一いけつまを作と本あふちを義てト
まるハといふをいけつきにあふけ

つき養てゆけるハとてふくいんをかし

かすめ

一　二月二日乃新酒をハ針賣の者り来
ハ鳥帽子賣の物遠市をそはゝ物
合ゐ者商人ゐ者ハりの始の清よりゑ
とゆしれハ針賣とりあへ者の事も忘
れ物すまじく

一　雪降とゆ場合のもとゝばや兼家てゝ
ゝ中ゐを使よつゝ年彼
使物ゝ門ゐ者ゝとゆしれ

協至おろき事にあるべいや法もとそ
こうこげ分

一 武家の慈傷ありときいて弟子法名宗
に法親又逝去 此事 是非色 傷生色 病死
のるひいろく歌有まづくひとつ人彼
志生色 病死色 行ると事 きだんする 彼し
とりたれハ法きハ 親そひ志ひ日 ゆく日
ふるとよ ふまてく ひいと 尚色 即ぬるけあ
一 山芋をハ薯蕷と ゆひところを 野老と ふ 塩

人山海を行 樵のやうなる 老志 鄙そつるよ
あるあをるあの 樵人たハ きてところほう
やらうとひとみ ゆれハや 山ハいもちよ
よと いもりのをたこうや
一 黄菊 紫蘭 咲こうれる 前載あるときて
志氏の人 あ 月まりゆれハ 富氏 色とものや
あるあ法を二いろん きべ ゆつき志 したに
もちかるとものくハ ふる法をこうめ
する又 よごり法を もんちゆまいくせうと

一 河州志紀乃浦まで 焼 あり天狗仕業とむまれ
つまてすりたりしをとりあつまりの手をを
ゆむ 音 あり 若狭より小濱まはりく
とりれぶもくあり 物 ふ 宿 とり
志ゝ飯の汁を一口まひけ汁の実ハ 海 と
ふ 蛭 れハ ら たちの汁 ゆ 人のけき
らゝていや 去 年八月ゝるまいをけと
一 雑 より 天台山 のわゝ 号 俗 あとゝがある
時 魚 氣 ゝ ら ふ 酒 塔 乃 法 師 来 ゝ ふ

ら 梅 ゝ ひ 箱 を ハ 生 根 薬 紫 風 と ふ れ ハ
何 ゝ ゝ ゝ ゝ む ゝ ひ え の わ ゝ ゝ
実 信 や 法 あ ゝ ハ 天 台 山 と ゝ 中 ゝ 氣
ハ 咄 ひ え の や ま ひ ち や し
一 京 に 稽 古 院 ふ あ り 又 建 仏 寺 あ 是 院
と ふ あ り 或 時 稽 古 院 あ ゝ 池 (家 の ま
ゝ 主 俗 乃 物 ゝ ゝ 時 ゝ ゝ 浪 人 の 果 被 之 果
報 ら せ ん り こ し り れ め ち の 弟 ち (我 ら
す む ゝ を ハ ゝ ち す ひ ま も ゝ せ ん あ ん と

てそきへ又そのことをハとりもつてるもきり
そそんとよぶけるりや

一遠州の四ようぐに古ちあり鷲野にお
りる武士のりくおるひとに手ぐれきへ
仕れしあがきを信ものうり書れまへをそれ
するのあそやと問そるる身業風也年節
をうらぶひ稼成おらんとすとするうち作の
いへハ乃鳴の遠ふるをまくさまんらのはい
んとあんハ色信徴のしらををけへて

すんざきりもできさせたまへと

一そもそハ源氏乃歌の映絵をそれたまハない
らいや光氏八年家乃歌乃をんぶれる

一護摩書れ本そる不動の前ふそるへの條
を人へくあの不動の條を二ツ三ツえんぐうし
やそんぶあらようぶを新愛をもてくい
たくハくませたまで言申しをいたりや

一命下のちあり度張安人宮殿て平家絵
うを居妻方丈丹中ゆる東書ゆを拍酒食

をよしおまてよ雑色をたゝぶる者せう平
家を直いける事あて雑こ昼食を所くへ
いけるりつまべいけてけらと

一
今下侍よ東をすゆる菓よ厳の御よ
服せず絶を為るれハ厳をハ食せられ
ぬをし人の品らこどて方平まいけし
あへおまてけらと
義を行うこ人やんるこん
御腹咲来れしこ所よをあけく

一
京乃町よそちいきれあとをうな商人こあたん
ざこあるんざこいふくきにゆけハをた
う菓をうほちのつくきくなうくや
ほれなはひきうすあ

一
生姜乃ひとあく者をうん付おとけたら
なつの場ハ乃つくりいづくれおくをりで
ほれ中く稲くうふ系ひきにゆくと
人をこうまちるやひ系のこ
名をう系といふくまち井

一宗長乃老爺乃社参ハ初ハ元年度
一人あり法号楚忽ハ一句ハ法ハ俗
老ハ宗長老爺ハ三くの年よせぶれまあり
一利陽ハてらひ山そるをもらひとりハ　女房
雪業めせくしとくられハかとんとすと
ちハ三ことをいてあるめせしハ為いて
ぬぞらひ山ハあをしよむしありやと
波うりてうちハ山ハ
雪ハ山ハくハ花の為　利休

貴ハ三ハ為年ハ我園乃
うぐひすハて為ハそうれ　雄光
一一寺の宗教世に敬ていハ山き唱食あり
つうおもひすぬのまあハ法ハ花の煙
ハれハ乃者を東雲我ハ者に金元中
此法ハむひ為ハ焼法ハて一来の米と
ハ為をハ世ハ法ハ大元乃法ハ者ハ
東雲これ業ハハ法ハたハ
一昼食あり東雲に船をすあハ時ハあハ

月一梅ゟ昼食初ると申ハ船をとりぬ
紀若荒とゝもあひ手ゟ海保をんくあつ
れ黒雲れ　あれゝせうすゝゟ
一水ゟ芦花月と聲る変いゝん　おつゝ猩あ
ゝもゝより月のあゝ舟ハ十六日月乃はいゝん
十分ゟ引詰てゝんゝゟ　射ゝ物ゝ桂男
矢つゝハ　十三やゝあり　十六ゝあり
ひゝあゝつゝゟきゝのいきゝゝ
けゝゝゝハ小田のかゝゝゟおゝゝまて　宗祖

一あれゝすゝいゝあゝゟ　すゝきゝたゝ乃
車に片梅あゝをんゝ一人の保ハ戒行ゝよい
なゝゝハゝなゝ花に一人の保ハ戒行ゝゝゟ
ゝゝゟ行身
一大昌知識をんゝあれれ小夜ゟ
夢程の人ゝゝゝ去月ゟ
一石ゟ北松ゟ夜福乃保ゟ仰ゝゟ　祢ゝゟ
せゝゝゝゝゝゝ程ゝ
一奥人招梅花　花人ゟ舟をゝれゝすゝゟ

一あつまりの寄いみしう物こまんけるう寄を
そ
あるてゆやゆ出ぬや尾よ大のつまて
こ人さまもえくわるる
書妻人乃やらたよまんとくまとハ貴之ぐ
ようるる もぞ
一津の国よ多田といふ在ハ日逆軍に
従処あるよ人足ふるる関ぬとぶ
きハ先て仕るの見ハたの史そりと寄者さ

あるハ八幡軍をうれそまをつきのぶよお弱
あまと
を絶たくうう
一五月乃湯よ三日の内のれ八月の湯
治ちんの病ろそ逆輝よ片偏ちわるよ
十五海月ぬとうきハ夢片偏と片偏ろり
ろあるるも年ろ病てハるいう一倍ぬてゆ月
小一度のゆうをいやさんとそひよ
一静よあるて願をうつてすよいらて
うるくまの

一或俗人扇を拾ひ給ハ書中の扇なるんの
役あらん俗皆ありく扇をつゝ南俗ハ
つまり汗ふきて有るよ

一又ぬ意をする時あり孔子の城乃
せあくゝ入てくい

一

一

一ゆゑ同学のうち人のまゝ顔をもとゝし
たまへといひやりたまバ自ままいてかき
す後よあり今俗ハいる物をもとれなゝど
し恨々孔ハ光張世情厚しとあり内ゆ遺恨
をふくゝきて先ん氏ハ方へ明教条
をもけんといひやりぬるゆんまゝ
なり孔幸曉より起て粥食をいそ孔目色
四ゝ志ゝ早くゝ笹掃るゝ手ハ掃除を

をれいをしてをきてり併の作事りまてをを
さらに他をかるくをせず何をて脇ハ生を
ときんをまさすとあきハよやとをたる

一 家元かるををするといをて妻いろよお後を事
男しる去ハ家元かるひをせよし或月のを
らきて、神社ををりしとりけを女房即位を
を或家のむをを本をせハをちをいよりく
をのぬをりさひををつをにすをと
あををり

一

一 家をて係家の中ける公合をちハ今他のを
上を公ををををそこを家のおをを屋をあるは
お乃字をつ生ていりをををおのをやハのく
さい事ををふをを生ををハをちハををを我
みをこををハをふしををを

一 宗紙と宗名つ生をををを三井をを人面のを生
宗名乃ををやをハをちをふををちものをあれハ
紙公ををれハをいおの白ををををををひに
するハをちをある年をて宗名

掃除もたらぬ之井に古寺　祇公文

坂くづりくてやむりしとに志かり

一 信長公東ちにありきさせ給ふ事あり馬
よそてひさ物成あリつるを浪花六路し
しせハ家ハとこそ右ハ六条ききハたかく
とりしりつるあの志らぬやと

一 百姓乃稼力あるあり越後乃子才智何れハ省
略 古きせきの明晋徳の小鼓乃大鼓に
とて出入のたゆる事なし 祖父は隠居の所

一 あらこハ家も何るゝそ稼穡に艱難をさ寺
建 紡績に辛苦をきかし我家乃濃をハ
よそならそ身袖のハてんするをしるひおけ
かくて之年あるを十月氣でんあまくつめ
おひさつしきまゐりを奥行する座敷へ彰ゆ
祖父をやひ給せハ辞退もなくて給ぬ孫一面
始いてとつとかめ人ニ家をそろへ侍らく
祖父の飲食こそあとさきもやうしあるに
祖父さまハ人の耳にハ筆に孫の名をゝ入れ

見れば年は八四ばかりなるとしより御おのの者
ハいとゝぬと
一
鼈眉目すぐれたる一人こゝに都人うと世俗の
ふをもうしまれる人の門をいたれば
めずらしかの中にいとうつくしげなる女こゝにあり
て酒ゝ肴いとうりをまぬきまゝ女こゝにあり
一和泉境そこなれへ第る所より就る男あり
ゆゑんもなきおくれを撫ぬるものと就見
さ酒よをつゝより此辺やまと盗人よりよまれば
陰有とり公せぬうたおゝぶ彼もきハむる
ちすゝてとりてのれてありけるれをえる
ふたちまち我物を奪まくそもとこゝよ所なる
地獄なくハ海ゐるしやとらまゝ捨よそちゐん
すまとめるにとまてもとりてもかゝれある
まいぶとゝ所さまハたりせハらそなり
実ハ今鈴ゐゐ角をゝん帯り宿院乃門
そゝりんとするを松乃上を鳥花ある
これをうハひとりまのよそゝふゐる

ひいるぬそ人とさけべハ爲ハうたくといそ
ものゝ津ゝて有しるしるおくけそころぶ
爲ハ島中の曽參とあり

一 夏の天ハ數日雨なりて民家旱損を歎民
神乃社邪と風流をなけ面を色ハ一落ふ
すいつも始るゝ者拝やなとは法しあくらかゝ
くなゝ富家ハうちうつき今爰ハなりり
ゝゝハ一向乳あいるんさ多少大敗を
てれつけゝてつて連つけとうち結をそん

きゝやゝとて笛をひとやひとりと始い
さわるにてゝふらふよ

一 頃浦氏四別の内吏ハ始めをゝかれを
小別ハ猫隠の面東別西別ハ膳蔦花西
南別ハ清原西新ハ和泉武ア面信
日氏もの名ハあるそや爲ます

ふゝ法ゝハ又ありゝ下ゝハ
はゝまて面ゝきゝゝ大面ふゝ

一 年ゝて法ゝ紀氏月芝乃社要へ逢ゝ

春門をたてまつりおてひらき尼て諸のそこ仕俗
ゑをもて此ハ酒もり法義あつくけてそち
条いうしゆしゆ酒もり法義とハ何のそや
法ハをいやたんとハねはくろひせ〳〵て
実をハ法色の尼て一ツゆうとあり又た
しんとすをハ若等の尼てまいつゆうとし

一 長屋敷中ゆ敷長京の国ひらく氏神へ条治
あをハ神ゑ悦表示解学〳〵 せ社
敷て大守のよ治りをんけせもめづらる

唐物やとゆ物
ゆうりのふ千南社氏長ゆ
ゆれ物ゆあるぬ物ゆとうぶくを
ひらゆ氏神宮たすけれ丁そすを

一 あゆ条氏表幽条法市坂乃寺条以ゆ墓
市をつをくを古墓条治あるめつて氏神
のあそそちう代ゆて
条殺をゆ海のゆうにるをすゆも
墓にハうて氏神やたのまん

一義政将軍乃御前ニ同朋方ニ御座居た
ル時御意を御損せんとやおぼしめされん
人八をなげ出し其車ゆくと御ら
れ
其方何様いそきたちゆくとさはぐまゝ
なりてまるるまいとりて懐ニいれて
一世中をいかゝ思ふ釈迦ハあらん
もとゝ思なるどうとゆてけるも鵜と鳥ら釈子
そあるを中をけ釈ありなかハ
釈なる僧なりてあらふとゆゝを実やそ
ゝもるい日れう宜よきいさ廿十日斗はき
越へ鳥ありてあるひあれハ鵜もきてり
又堂塔も義来ある三るをあるに鵜鳥
もむるに父父ゝて鳥焼ゝげそ子ゝ子ゝと
ゝ堂塔伽藍ゝて宇ゝとゝたた
きハきれもら釈子でハないゝ
世中乃親なる者あるゝ人ゝて
なるゝつけてもなるゝきゝ
一廣橋大納言殿義勝公へ相国寺大保長老ゝ

て使給をもつて明日乃和漢よ孫右衛門
疱瘡ハ屋敷ハ免状ハ今市彼家を形とあり時
彼信を呼給ひて ひとを学ありそれハ乃の
おこりの年ハおこりなり
一宗牧へあるこを小角豆と茄子とをとり
とれハ
けつき殿なすひの与一弦ゆて
お使ひ〻〻者ハ就てすゆ
一関挑入江殿と加古乃人ありて牧海の時宗牧
鶴合てよあり
かつきあるを若いろ乃部屋にて
入江乃あまハ〻わきなるゆめ
一弦殿へ田舎ちをつまとてよくいんと昔
香ものをすゆ事あり 云伝られ人と
文とハ家につきうと送れる二種ハ大阪
月花れ亀ちとて見きるとれ
はるくとよくいるより伝ハれと
うハきあるとてやのわきさぐん

一旅人数奈良に一泊氏宿をとり泊りし所
のこと共を書記れば八月廿日より廿月
よりまり年八月廿日より廿八日迄実八
度を清らかにして毎日の数ありて今日の事を
旅人いふそれなる宿り泊りを乃ち
うまれ生れ我すむ所乃ち所
数ケ所つけ名やし

茶乃湯

一西行法師伊勢の宮詣をすまし乃ち
宮より又都乃ちかへりそすむ
山こそかくれ名あるうちの星

一茶是釣瓶ありあり又食を消すもい
へる

我門よ月さ高し是あるなる
急しき人ハ夏にしたんす
なりして人ハ百姓のむ事共ハ百姓の

ひてそれなるハ秋くハ一枚茶を毎日
さん種日ありてもゆゑ〳〵と称ふれハ
そ幸管なる日まれ又たよりとそれそ
ふ食のそえてハあんの名れあんかゆや
の茶屋と郭をかりとり法ハ憂表像
人と云題をそて
まそてあるこ小田くまとて行雨を
大名人やむはいてん
そてある法ようそふれんぐひとうぐゆや

結ん世をむもろすむ人ハ茶を愛
賊乃男ハ茶をいるく報云せ一旦ハ昭五
何とかく人ハ玉をかけ茶碗
ゆのこひて茶をのませよ
義をのこまれ人ハ山星ハ
名きの茶ハ書を見をハや
利休ハわひ乃茶を忘ていかを考ふ
んこ原ふむもひてハうまくて忘失せされ
ようん

其ものあれやとあるぬ源山乃乃ゝゝゝゝ
友と成ける国乃　堀内
是八家屋敷ハ　家さてあり　古田織部乃
家ハ　つまゝくに作せゝれゝ

一　泉加ゝ乃酒屋を　定家の家ゝや
泉なる横山　炭乃　ゝゝゝゝゝ
とゝるゝにつゝすゝ　乃事をゝ

又　古家さ
いゝにゝていゝるゝやけハゝ泉なる

横山炭乃白くゝらん
わゝゝゝめゝゝハ炭を　ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　炭屋

一　紙公信濃守ゝて山家乃家屋ゝ五炭家を
下ゝ　ありつゝに湯のめゝゝゝれハ
お茶ハめゝる　ハ書乃　ゝゝゝ

那京坊

むめゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一　和泉乃国　藤田乃家屋家　紙一枚ゝゝ

弱き事あり其屋敷辛き歌ハ冷て歌
屋つゝまりてとゝのふれハ
家和と行されまゝにそのゝて
歌屋志の回れ　森乃　蓮伯
一　高徳ア助ゝ物語ありこい葉ゝ持て物語
よ者のいふけ葉士ハ雅ハ後ゝとふ上森春
松ゝ雲切るゝ迄音あれハ彼家ゝ鈴乃
ハ葉ゝ入て　糸ゝ書　青一ゝ　重子　金
とあり

一　ある寺の住持煙那ゝ入まれゝ古歌の葉
ゝ主人ありかゝるゝ問ゝ結まの葉を
ゝ世ゝとたゝ物ゝ辛ゝ一口のゝ見ハ歌ゝ
の若名やゝ志ゝ時女房ゝ物ゝ物ゝ
物ゝ世のゝちゝやゝこゝゝゝ辛ゝはん
事ゝく今一口二口のゝ申ゝくゝゝゝ
ゝまいゝ

一　足利乃門前ゝ焼あり住来乃家ゝ葉を
ゝゝこゝすゝ迄ハ学侶の智恵を葉せん

ートたくさん信濃つくり茶を出されハ人のひい
き茶ハおりるいとしいりけ五信風ゑかりとも
のまんとふ焼たるようろこんてあるへより

一
時ハ高あつき仕民家ふむむらあり川まわ
茶屋ーておるゆきんあくらけるる高人
のと使ハ茶あるれるとしやきみ茶きものま
きとられハあ茶やと張毎屋
ーとふくたちらりーいるわーなりとのまー
ませ高人いや之服ゑそ祝宴ハ一張たく

一
清水あまさ人をとゑひ清水へまりてーら
まの茶屋さんとやたらふ中ひとりの茶
流茶茶をのそとおわのむ指面れ法師
たりあまきあハむーよたふーえさきに
てハくらーうすゑハまりとふへられまを義
別ーられハ家るる人をけうきん法ちうと一斤
のーても茶世ーそすれと

一
ゆうまるまつよう茶梅人あり茶乃湯ーふ

さハなにゝ入ぬるやと教孝ハ米一乃嗜茶
壺（つぼ）ひよさあゝハ一ツもとめさい伊賀ゝ弱
これを茂物師ゝて孔壺ゝ不を代ハ奥に
ひとり後人秘蔵ゝ名を年表法花経伊賀和
俗つけゝ人を家事をとゝハ年表ゝハ
家がひゝさたに法花経ゝハ奥に不壺乃
物変ハ伊賀和物なり然ゝ作ゝる家まく
なけきハもちあるくたゝるもとる
不ゝゝ

一古今万葉集ゝ不壺をもちてゝ手むゝ人あり
少去めつゝゝ心をそんと詠めゝゝも
あてかゝすいとぬゝふきゝの不ゝ也
いゝ枕ゝ弱ゝゝ波壺ぬゝ不古ハ古
茶今ハ新茶万葉ハ上古義ゝゝ集ハ
いつきもあつめつむゝ茶ゝ徒をまつく
名ます

一山家ゝ居給乃茶信ありたまゝ家を
しる物相一服をまてゝ茶をゝゝ

元八こいなく臺よつめてり色番味を此
弱へ者おなじ事やかく分任居を名臺のあん
と八一度事を分彼臺をえんとこ不得眠
就を指物て見八少賊れ粉骨を尽
働るところ姑の稲を見せいふ千疫薬を
栄寿もあへけ嬉妙乃爺よ法らん法臺
い作といなく法不と考するなり

一

鷹こ乃元人ともあれ給を法水岩雑
吟て酒を姫なりいまだ人こらもあり

一

舎潮を辛を茶をしるはそれ八人を
う眠入りけまとも上社乃人目をあれ次
乃膝をつめれこれ目をけまま又下社の
膝をつくに彼を八茶乃礼とおもまを
ちあまとそこうにいてまりくれ八辛を
いまを茶をておりり面目おき由雅者あれ

一

東雲乃まへ人来つくふ茶臺とも出
又茶者とりたいまりかてやいぶれ
ふまりすけまとも茶者八唐詩そこ八

しらとあれハ男合点申候ハ神てしらし
ひらぬ一ぬ月ニ今夜ハ熱田乃子十六七ニ
なつき来りしかるに代ハ何そ男をつけ
てたひらへとやしせ申ハ方たをれたるよと
つけらるゝ報あるさまをふり感して後たる
唐者て出発あるハいやしく我〻ニ来たの
せられよ唐者ハさてハ性ちやこれたるよと
かつけふされ申

一大和国御拝領ありし時こいまをひ殺ハ
ハ秘蔵乃井出茶碗とれたりハ気色かハ
半ふく幽霊の為れ来ふ為来よ見
と御使あるハ

ハ井つ乃あるさわ〻井出茶碗
とゞをハ我身ありよ〻〻し ふ
と係し使ハハ茶碗ハとれすハ為てあ
らふそとハ威信ふて至る

一雄長老あるに立ち長に数寄屋ハ
ないいやふしとの為ありハ為ハ茶

よそもたゝてゝおそれよと存候あつて候
猶寺尾あらぬハお茶やむつかしれハお茶なしぬ
御手ひとりハらすのよかしく

一 後陽成院乃御時御印切とて御璽おハします
法らを雄長老

一 御茶てハちやくとすよしつなれハ

一 をつきまいて れもえいです

一 慈照院殿愛子思召御璽あり名を何と
つけんと御工夫ある比は寛正二年八月廿日
これある今日ハ吉日かとお爲あれハ女房達
おきてもあへるを申しけるハ袖乃をまいらせ

一 せよとてこれよりあるおもしろ乃をかす
やさしく続河沢をむちハ世話ひ
たれもうけ名法の璽のみちひられ
れふまつりけれ歌にまえんて
しお同世あれハ続河沢よりも河へも
袖乃乃字えあけりけるまさしよ
いやめつらしき雲の上まで

代中来より 細乃とゝ堂あり若し

祝淵多

一 抑四十六代孝徳天皇白雉元年勝寶元年
己丑の春時に奥州より黄金を献ず 帝宮
年号ありしとて大皮家持之卿めされ給ふ
皇乃民さくんとあつまるる
みちのくに山とこそね花さく
と被仰出ける 元和九年まで八
百六十五歳なり 和銅乃山に黄金涌出
給ひしより

一 正月ハ二十日まてみな／＼むつましきあいさつにて
書ちり御にあそひなと唐土なにとあるか
元日ハ九日二日ハ十日三日ハ八日
一 右大臣信長公あるとし乃元日あつまり給ふよ
の御膳まいりたるを御覧す事ハ悲しく
ありけれハなふまのこ志まさえとて大小郎気
一 急つかれり大相国いふこち下藤吉郎殿す
て服たの時お機嫌あしきハさるものなく当
年より読書をさうらハしとりよなさるへき端相
なりとありけれハ少れかそ御秘蔵せぬあん
のまくそのさしよおくやくを志るへなかま
ひきとりや
一 同信長公へ諸大名まいりえる乃おほしあるし
て御饗そて依あるやうこすひの節まいらて
たまく御陣れこもして一志ゆくまゐて馬
よの中におほひつきハのりたまる是乃か
くるまきてあゆかりしくいさらへさハと御従
あるまたきもらむの返答なし又藤吉と夜

こりあんさ子秋茅葺乃山美みてゝ
そのゆへを今殺をるゝたびいつもうちを
ちやのゆか一天よりとゞもたまゆゑきつげたる
ゆゑくものたまひしゞ海おとよ殺れあると
なれハうちたまゆゑなるり

一
古道之伝長公始くはれはおりて至たに
扇子二本まきせられ市ゆ人之分あり
はかれいりゆゑ氣をるり次時の拳者
小云とあれまれハ目あゝ日本をゆれ

一
振ゞせ給ふゆうちたるゆ川おをうを
元日はまゝ茅ふ人ちたるゆ川おをうを
ふ人えひまを夕をめむうあるゆ八重津太
子まわきゝ海きあるたるあ町ゝゆうて
ゆえひちくゝふれをゆをむ去うけて
まうふのえんひをのちんきをするのいろく
人のたうゝむるのすゞこをおこすてゆうゝ
ゆゝゝ去ゆのいそゞりゝきゝやこりきれ
ちんえひまゝおひて打おうゝ之逢河乃

むかし寺すゐにもろをとわち人今にありきぬ明さく
ほうにゆかりの人付これハいかなすゝ事とはを
うをぬしもみれハむかしありきもをけし
まうしをしれぬなかしていかやうこれなれえひきの
おかくろうそて御しよめそくらといらひなれハ
けさもくにらうきひき殿しおしかへろらなう
てらいらでありん梅のこあるとこれなりとよ
ろうしひていふ〻沉おきとあれるとなん

一 若狭の太守武田殿ハ系譲乃当家をかへをされ
寺をたく慷慈あまりしす侍事とてそ家の
事をまうす人正統おもすゐにをとて殊にもあ
ひたすら武を立一つらし中にて於其後
命下保もよくまかりなかりける侍ち王金へ申
あくへきよしなりしにあるとし正月
は菓子に胡桃を千送れとありけるを百八
十ゆりに侍ふ事と思ひ一首の狂哥を
案しけるか
下さるゝ人はその数も若ゝ代も

月おくりの六百八十
大きなる代官をいとおしくしくしんさくあれ
あやまる処給ふ事はまことも是ハ殺生の事
を事為まして仏法を感ずる条今度の科
半ハのがるすとあるべし
一商人のなりひさぐて正月ハ殺れ人ちにるべ
銭をとらるるまいあるこれをうんぬんてうけて
たいいとあるものくるる月のめけ銭を
かぞくをとり手元日乃銭つけ大ぶ機嫌を

そこるとこ元よこたらき中おのあてとと
こるとこ乃お仕合ハ孫ふ事なるかなて
たいいとうとり
一あ人縁をいのれためもつせ乃くんおんう
一七日さんつくれるがやらゆく六日めに来事
もりに像と我ふ人りれあにれ乃ひそ
さくひさあふとゆをこハそもいんせん
とるひ仕ふちに爰なれバさあてとり
あ孫を生ふ宿坊ふ太乃む孫を

うるわしかれハめでたき大悲乃告愛なりやら
てアラヤのゆゑにあ[illegible]をこうるかともらかん
とでゝ者る焼しげけて又こうりぬまんする
衆乃愛よあの只にあいてきくたゝ右る
ムさうとおもひむとうきぬれハ愛にくあり
件乃むを又富貴あるこ[illegible]ハいよく後悔あ
之量乃利生あるこたゝ[illegible]をこうる
わどゝちたまりんとぞいひける
あいとひする高人ありてもこ[illegible]乃毒ハ[illegible]毎

こゝろちがりなどゝ[illegible]をいれてきたるか
そあつけのもちあり者よりつゝのとりい
して乃ちとこ[illegible]をこれいかゝ[illegible]てあけて
いかゝたとゝけむとりおこしてうちハ
そ女移ゝうゝきを[illegible]つゝあへりあけぬ
きハいつゝのちやのこいづゝやゝ辛ゝまて
ゝもさゝにいてすそのゝ乳ちよくをそこ
あひ移ゝ[illegible]をこうるゝ[illegible]けそうゝ乃
ゝ者する鉢をもちいてありけまにいとく

なりていしゐあんはうがさけんをるを年
好く年をかるるをもて我あきなひハハより
あら始すまといとふさり

一 桶結ひあもじが元日ハ鉢ふとわれく祝う
なられいるやうハ元三ハ大海日まれまう
ゆひ本をすうハ人よハおすりが又桶より
ともあるまいそやて男そのゆひ本を
子あらかと方あら始とまわるいうと
いふまれハをを年をこれ仕合ハ祝うき

一 品甲突大原乃結ひ菓子乃玉本とふ
志あり正月乃ハんれ着ハ栗れ本うく
柏の本うこ巳角を制て親子三人祝ハ
九星巳方にしうの桶うの名や

一 武家乃城中ハて至孤れ祝う事あり
を先ハよあうすいむ事をにとふ年て
夜ハきうわ祝ハ餅乃うう衣
をのきくう身れ上にをよ

一 京都六条大場を文宋とふ者武れ作

者ありきを親族合議ありて
彼為右大事よあらを初文宗雄長を
へられしを八代義合文宗と大内乃
將軍となりく板
山新父乃貪を此神義をつゝ
為右事をやるんとすん
大乃為右家やけくより板一板仕合をり
面白ゝ也しも

一 義よ年都婆を立ると思ひ見て板煩ら
如夜あり特士を呼くらゝ八せて天八年
都婆八本て立ら後ゝ行待甚
らきゝ八本後せんと板ゝり

一 別りたといふ文乃地獄毎年大晦日
永浦乃百姓ゝ少を二ツ清あゝ
例あり或時一ツ乃原白人氣色ゝ八り
服立するに元日服を着て女房ゝあ
て打ち今年八形も如ゝ者せん と云ま
彼新のゝ乃を二ツ打て来せり

一 右相国殿河内国より織物参らせられ候旨
歌の事 家卿方へ申入れ候 時板倉宮内
入道に依巻頭の歌自ら
なみ木にて花ハつぎ〳〵に咲ける
とありしかハ相国大さに感ぜられ
手懐紙をもせの方へ云合法師へんせ
ぬ〳〵せられ候 構義不斜さふらひ
さまハ古の歌自おもはれ候 殊ハ為家卿
栄代めでたき事なり 後世聞いて

此懐紙ハ三條の入道殿ハ十になり
給ふとし云御父母御寄合申て我らむ
をもうけ給ふ 神あにてをはしますゆ風情梅檀ハ
二葉より代感不堪さふらひ 又かこひ
て栄をあ〳〵く給ふ 古わとさいふなる
なけまてはせてこそなをして目出ふ給へすえ
なんをいあるへきいろまても永〳〵こんを及
ひ此書をかゝせて申り給ふ
寛永五年 二月十七日 安乗院

内閣文庫

板倉侍従殿

糸

内閣文庫

元和元年之庶安楽院時世平穏之事
第々八別而おもく存ぜ事集
りく草子ゆ千張やうかの愛
一毎年之八冊以御筆給矢可仕と
存奥に書付置申
寛永五年
三月十七日　宣宗

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan